



## 👁️👁️ みどころ

1989年は世界も日本も転換点となる“激動の年”だったが、2014年も、香港では雨傘運動、台湾ではひまわり学生運動、日本ではSASPLとSEALDsが！

60年安保闘争では国会突入による樺美智子の死亡があり、韓国で1980年5月18日に起きた光州事件では、戒厳令が布かれ軍隊と市民との籠城戦、市街戦が展開された。しかし、“市民的不服従”による香港の雨傘運動は・・・？

本作の監督は自らデモに参加し、警察官から暴行を受けた1987年生まれの陳梓桓。登場人物も黄之鋒や周庭らの“著名リーダー”ではなく、たまたま監督が現場で知り合った“僕ら”で、その中には16歳の少女も。彼らはなぜ雨傘運動に参加したの？雨傘運動の意義は？その成果は？逆に、その限界は？

それを「乱世備忘」としてしっかり後世に残した本作は、少し突っ込み不足は否めないが必見！

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■香港の陳梓桓監督に注目！■□■

本作は1987年に香港で生まれ、香港バプテスト大学で映画制作を学んだ陳梓桓(チャン・ジーウン)監督の長編デビュー作となったドキュメンタリー映画。パンフレットにある「監督インタビュー」で、彼は「ドキュメンタリー志望ではなかったが、社会の変化を身をもって感じる中で、ドキュメンタリーを作り始めた。」旨を語っている。そしてまた、そこでは「市民不服従や市民運動などの政治社会運動に関する作品が中心になっています。それは自分たちを取り巻く環境が酷ければ酷い分、興味深いテーマが出てくるからです。特にこの数年、香港の政治状況はとでも酷い状況になっており、様々なテーマをみつける

事ができます。」と語っている。

本作冒頭、「真の普通選挙」を求めて若者たちが街を占拠する“雨傘運動”に陳梓桓監督自身が参加する姿が登場する。これはホントに陳梓桓監督自身がカメラを手にデモ隊に参加していたためだ。そして、「カメラは僕らを守ってくれる、興奮した人を抑制する力がある」という思いでデモ隊に参加した陳梓桓監督は、いつの間にか前方に押し上げられていた。そして、彼は同じ香港人であるはずの警察官たちから暴力の洗礼を受けることに……。これは一体ナニ？そう考える中で、彼は同じ世代の多くの若者たちと知り合い、彼らにカメラを向けていく中で本作を完成させていくことに。

1960年6月15日、日本の国会を取り巻く安保条約反対闘争デモの中で死亡した東大生、樺美智子は、死亡後、母親の手による遺稿集『人しれず微笑まん』（60年）（三一新書）を世に残したが、陳梓桓監督は香港の“雨傘運動”の2014年の79日間の記録すなわち“未来のための備忘録”として、本作＝『乱世備忘 僕らの雨傘運動』を世に残すことに。本作では、何よりもまず、そんな陳梓桓監督の問題意識に注目！

## ■□■ “僕ら”とは誰？何と16歳の女の子も！ ■□■

日本での“60年安保闘争”は“全学連”（全日本学生自治会連合）を中心とする大学生の運動が注目されたが、本作で陳梓桓監督が主人公として取り上げたのも3人の大学生。それは、①香港大学にて英語教育を専攻し、歌唱コンクールと演劇にも熱心に取り組んでいるラッキー、②香港大学で法律と文学を専攻する、大学一年生の女性レイチェル、③准学士（日本の短大に相当）の学生でキリスト教徒のフォン、の3人だ。

雨傘運動のリーダーとして注目され、その象徴となったのは当時17歳の学生だった黄之鋒。彼は2014年のタイムズ紙の表紙を飾る「最も影響力のある10代」に選ばれている。もう一人は、私も新聞紙上で注目していた女性リーダーの周庭（アグネス・チョー）だ。彼らは中高生による組織「学民思潮」のリーダーだったが、香港各大学の学生会の連合組織である「学連（香港専上学生連会）」の学生たちも雨傘運動の中心だった。陳梓桓監督が彼らと親しくなり、彼らを主人公として同じテーマのドキュメンタリー映画を作れば世間の反応はもっと強かったはずだが、本作の主人公たちは彼らと違って、無名の存在だ。

本作にはさらに下請け建設業者の会社に働いているユウ（25歳）や、後半からは物静かな性格の中学生レイチェル（16歳）も登場するので、彼らの雨傘運動への参加の動機や、参加の仕方に注目！

## ■□■ 一国二制度、真の普通選挙、「8.31決定」とは？ ■□■

香港がイギリスから中国に返還されたのは1997年7月1日。私は1997年6月13～16日、香港旅行に行き、返還直前の香港の状況を見学した。それから約20年を経過した今、「一国二制度」はどうなっているの？また、中国（本土）が香港に約束した“真の普通選

挙の実施”はどうなっているの？また、“8. 31決定”とは一体ナニ？これは、中国（本土）の全国人民代表常務委員会が2014年8月31日に下した「選挙に出馬するにはこれまでの行政長官委員会と同様の1200名の指名委員会の過半数の指名を受けなければならない」という決定だ。親政府派が圧倒的多数を占める委員会の中で、民主派が過半数の指名を受けることはほぼ不可能であるため、この「8. 31決定」によって事実上、民主派は立候補への道が閉ざされてしまった。これでは“真の普通選挙”なんて、完全にインチキでは・・・？

本作のパンフレットには、10頁以上にわたってそれらの詳しい解説があるので、こりゃ必読！

## ■□■雨傘運動、ひまわり学生運動、SASPLそしてSEALDs■□■

1989年、日本ではバブルが崩壊し、昭和から平成に移る節目の年にもなった。同時に、この1989年は世界的にも、6月4日の天安門事件、11月10日のベルリンの壁崩壊等、大きな転換期になる年だった。

他方、それほど規模ではないが、2014年は①本作が描いた香港の雨傘運動の他、②台湾のひまわり学生運動、③日本のSASPLからSEALDsへ、と大きな社会運動が起きた年だ。この3つの社会運動が互いに関連性を有していることは明らかだが、それらはなぜ2014年のあの時期に生まれたの？

本作のパンフレットには、「2014 アジア 台湾・ひまわり学生運動」でそれを要領よくまとめているので、その勉強が不可欠。さらに、①「香港」、②「台湾・中国」、③「日本・世界」の年表もあるので、その勉強も不可欠だ。

## ■□■論点の整理と検討は？その掘り下げは？■□■

日本の“60年安保”“70年安保”闘争をテーマにした映画はかつてはたくさんあったが、昨今は全くない。しかし、韓国では1980年5月18日の光州事件をテーマにした映画は『光州5.18』（07年）（『シネマ19』78頁）や『タクシー運転手 約束は海を越えて』（17年）（『シネマ42』248頁）、『1987、ある戦いの真実』（17年）等、たくさんある。光州事件のような政治的なテーマを映画化するには、監督の整理の仕方や検討の視点が何よりも大切だし、その掘り下げ方如何によって、名作にも駄作にもなりうるが、さて本作は？

そんな視点で見ると、本作はドキュメンタリー映画であり、かつ「市民的不服従」を前提とした雨傘運動だったから、計79日間の出来事はよく整理されているが、その掘り下げはイマイチ。その原因の一つは、陳梓桓監督が映画の勉強はしているものの、政治の勉強や社会運動の勉強はイマイチのためだろう。それはそれで仕方ないから、雨傘運動の意義やその問題点、限界点等についてはあなた自身でしっかり勉強する必要がある。

## ■□■『チリの闘い』で見た“命懸けの撮影”に比べると?■□■

日本の“60年安保闘争”は平和的なデモだけでなく、国会突入という騒乱事件を引き起こしたため、樺美智子の死亡事件が発生した。また、“70年安保闘争”は“全共闘”や“連合赤軍”を生み、武装闘争に発展していった。他方、韓国の光州事件では、戒厳令が布かれて軍隊が出動し市民との間で籠城戦、市街戦にまで発展した。

それに対して、雨傘運動はあくまで“市民的不服従”(良心にもとづき従うことができなると考えた特定の法律や命令に非暴力的手段で公然と違反する行為)が原則だったから、デモ隊は両手を上に挙げる“平和主義”を貫いた。また、香港島中心の金鐘、銅鑼湾、さらには九龍の繁華街旺角などの街を占拠した学生たちが武器を手にすることは一切なかった。したがってそこでは、逮捕される危険はあっても命を失う危険はなかったが、『チリの闘い 第1部ブルジョワジーの叛乱』(75年)『第2部クーデター』(76-77年)『第3部民衆の力』(78-79年)(『シネマ39』54頁)でみた民衆の戦いは命懸けのものだった。また、それを撮影したクルーたちも文字通り“命懸けの撮影”だった。それに比べると、陳梓桓監督による雨傘運動の備忘は、ある意味かなり気楽なもの・・・?

## ■□■“雨傘運動その後”をどう見る?敗北?それとも?■□■

“雨傘運動その後”については、パンフレットの15頁に詳しく解説されているので、それをしっかり勉強したい。

雨傘運動の象徴的存在だった黄之鋒は、違法集会を組織した容疑、さらにはデモを巡る別の裁判等で有罪とされ収監された。また、雨傘運動以降、従来の「民主派」だけでなく、「本土派」「自決派」「独立派」と呼ばれる勢力が台頭し新たな一大勢力となったが、“資格はく奪”という手段によって、民主派の勢力は弱まっている。周庭も2018年1月の立法会議員補欠選挙での立候補が認められなかった。

他方、中国(本土)では、“終身国家主席”となる道が開かれた習近平による独裁体制が強まっている。これでは“雨傘運動その後”は敗北と言われても仕方ないが、さて、あなたの評価は?こりゃ敗北?それとも・・・?

本作はあくまで「乱世備忘」だが、香港の“一国二制度”が今後どうなっていくのかは大問題だから、本作を契機として今後もしっかりと考え、しっかり見守っていきたい。

2018(平成30)年10月25日